

天然ワカメ，ヒジキの分布・現存量調査 とくしまの海藻増産事業

棚田教生，多田篤司

近年，消費者の安全・安心志向により，養殖・天然を問わず国産のワカメ，ヒジキの需要が高まっており，増産が望まれている。徳島県沿岸では鳴門市から阿南市にかけての北中部沿岸に天然ワカメ，ヒジキが自生しているが，これらは水産資源としてあまり利用されていない。

本事業は，未利用の天然海藻資源の有効利用を図るため，徳島県北中部沿岸における天然ワカメ，ヒジキ等の分布及び現存量を明らかにすることを目的とする。本調査は，海藻の生育面積及び現存量の推定がしやすく，今後漁場としての場所の特定もしやすい離岸堤や投石礁などの人工構造物を中心に実施している。平成29年度は阿南市沿岸の天然ワカメ及び鳴門市沿岸の天然ヒジキについて調査した。

材料と方法

過去の藻場調査等の知見と現地漁業関係者への聞き取りから，ワカメあるいはヒジキが自生し，かつ漁場としてあまり利用されていないと考えられる場所を選定した。平成29年度はワカメの調査地点として，阿南市椿町蒲生田地先の投石礁，ヒジキの調査地点として，鳴門市北灘町折野地先の離岸堤をそれぞれ選定した（図1）。

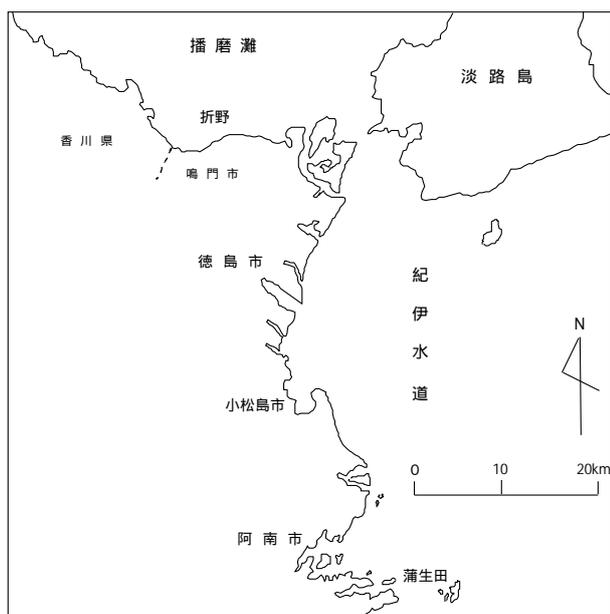


図1. 調査地点

ワカメの調査は平成30年3月に，ヒジキの調査は平成29年7月に実施した。まず船上からの目視により海藻類の分布の概況を確認した。次に対象種の平均的な生育がみられる地点で，潜水調査により対象種の生育水深帯，生育被度，生育帯の幅を測定した後，採取りを行った。採取りは50cm²の方形枠を用い，群落内の3か所で枠内の対象種を採集した。現存量は，単位面積当たりの平均湿重量から，人工構造物全体の対象種の生育面積に引き伸ばすことにより推定した。

結果と考察

天然ワカメ

阿南市椿町蒲生田

平成28年2月に蒲生田地先に造成された投石礁について調査した。この投石礁は蒲生田の浜の沖に設置された2基の離岸堤のさらに沖合に位置しており，投石礁周辺の海底の水深は6.0m前後であった。

造成2年後にあたる投石礁にはワカメ，サガラメ，カジメ，ホンダワラ類から成る良好な岩礁性藻場が形成されていた（写真1）。ワカメは水深3.7～5.2mの水深帯に被度30～60%の群落を形成しており，局所的には被度80～90%の地点も見られた。ワカメ群落における1m²当たりの平均湿重量は6.9kgで，投石礁全体におけるワカメの現存量は8.3トンと推定された（写真2，表1）。

蒲生田地先は天然ワカメの主要な漁場となっているが，



写真1. 阿南市蒲生田地先投石礁の岩礁性藻場（平成30年3月）

表1. 平成29年度の天然ワカメ及び天然ヒジキの調査結果

調査地	対象種	調査日	生育水深 (m)	生育被度 (%)	推定生育面積 (m ²)	湿重量 (kg/m ²)	推定現存量 (t)	備考 (現存量推定範囲)
阿南市椿町蒲生田	ワカメ	平成30年3月28日	3.7-5.2	30-90	1,200	6.9	8.3	投石礁1基
鳴門市北灘町折野	ヒジキ	平成29年7月6日	-	50-100	558	15.5	8.7	離岸堤8基

漁場は海岸に近い水深の浅い海域であり、今回調査した沖寄りの投石礁はほとんど利用されていない。投石礁のワカメは品質面でも支障はなく、今後ワカメ漁場としての利用も可能と思われる。

天然ヒジキ

鳴門市北灘町折野

折野漁港を挟んで東西に設置された7基の離岸堤（写真3）のうち、西から3基目の離岸堤について調査した。ヒジキは離岸堤内側の潮間帯に被度50～100%の群落を形成していた（写真4）。ヒジキ群落における1m²当たりの平均湿重量は15.5kgで、大須地先の1基を含む離岸堤8基におけるヒジキの現存量は8.7トンと推定された（表1）。



写真3. 鳴門市折野地先の離岸堤（平成29年7月）



写真2. 阿南市蒲生田地先投石礁のワカメ群落（平成30年3月） 写真4. 鳴門市折野地先離岸堤のヒジキ群落（平成29年7月）